

乗り物で行く「おくのほそ道」 その3 越後から越中・越前 そして美濃へ

●越後路に入って

鼠ヶ関を越えて、旅はいよいよ越後国(新潟県)まで来た。

「おくのほそ道」は、右手に日本海を見ながら羽州浜街道を南下し、村上を通って荒川を渡り、坂町の乙寶寺(おっぽうじ)に立ち寄る。そして築地村を通って新潟に入ったと「曾良随行日記」に記されている。現在の地図上で確認してみると、乙寶寺を過ぎたあたりから、海岸線より一本引込んだ県道3号線(新潟新発田村上線)を歩いて築地村を通って新潟に入ったことがわかる。ことによると、昔はこの道が海岸線沿いの羽州浜街道だったのかもしれない。

鼠ヶ関駅を出発する列車は少ないので、列車に合わせて一日の計画を動かさざるを得ない。

二番列車8時42分発村上行に乗らないと一日がうまく回らない。村上で18分の待ち合わせで新潟行に乗り換えると、新潟着は11時05分。

新潟に入って一泊した一行は、翌日弥彦神社に参拝して一泊し、寺泊を経て出雲崎まで進んだ。

新潟で昼食を済ませて、越後線に乗り吉田まで行き、弥彦線に乗り換えて終点の弥彦で下車。

こちら先人に習って弥彦神社を参拝後弥彦温泉に一泊することにする。<弥彦温泉に一泊>

●越後から越中へ

出雲崎を出た芭蕉一行は、日本海に沿って柏崎・黒井と進み、関川を渡って直江津に入った。聴信寺に立ち寄りこの地に泊った。翌日は越後高田で知人が集って句会が催された。

そして、名立・能生・糸魚川と駒を進めて、市振へ。

芭蕉が残した文章では、象潟・鼠ヶ関を経て越後路に入ってから、暑さと湿気で体調を崩してしまったと書かれており、これまでほどの筆運びではなくなった。越後路に入ってから、「佐渡によこたう天の川」を読んだ句ほか一句が記されているが、旅の記録は親不知の難所越えまで飛んでいる。

弥彦温泉に一泊した翌日は、弥彦駅から弥彦線で吉田に戻り越後線で柏崎へ、柏崎から信越線で直江津へとなるのだが、国鉄分割民営化・新幹線登場等の影響で、ここからの鉄道の旅は少々難解になった。弥彦発8時20分の弥彦線に乗るために、今日も早起きしなければならない。吉田での越後線への乗換えはスムーズに行っても、柏崎での信越線への乗換えがまた時間がかかることが多い。

直江津まで行くともう昼飯時になってしまう。やや早めの昼飯を食べて、すぐに「えちごトキメキ鉄道」という何やら意味不明な路線名の鉄道に乗り換える。列車は各駅停車泊(とまり)行、車窓から日本海の荒海と親不知の絶景を楽しもうという試み。トンネルが多いので途中で居眠りをしていると景色が後方へ去ってしまう。

糸魚川駅を過ぎると「あいの風とやま鉄道」とこれまた理解に苦しむ名前の鉄道に変わり終点の泊駅まで1時間40分。

「おくのほそ道」は、親不知を越えて市振で一泊して、翌日境川を渡って越中に入り、入善まで進んだ。黒部川を渡るために馬の世話になろうとしたが手配できず、やむなく人を手配して荷物を持ってもらって空身で渡ることになった、と記述がある。黒部川を渡ったあと滑川に一泊。「富山にはかからずして三里東石瀬野」と書かれているので、富山には立ち寄っていないようだ。また、石瀬野の横に「渡しあり、大川」と添え書きがある。

石瀬野(いしぜの)は越中守だった大伴家持が狩猟を楽しんだ所で、万葉集に歌が残されている。

石瀬野という場所はどこか?富山市東石瀬野とする説と高岡市石瀬野だとする説があるようだが、

「二上山・石瀬野を見て高岡に到着」という記述があり、高岡市であろうとする説が有力らしい。そして、埴生八幡・源氏山・卯の花山を経て金沢に入ったと書いてある。石動駅から倶利伽羅峠を抜けて旧北陸道と言われている山道を辿って津幡に出た。

「あいの風とやま鉄道」で泊から富山まで50分程度。ここで金沢行に乗り換えると夕方までに高岡に着くことができる。

高岡に泊まって高岡城周辺を散策するもよし、金沢まで駒を進めるもよし。<高岡に一泊>

●越中から越前へ

金沢まで辿り着いた芭蕉一行は俳諧関係者との再会や句会の他に物故者の追善の会等も催し、九日ほど滞在した。その後、野々市を経て小松へ。小松では多太神社・立松寺に立ち寄ったと記録があるが、立松寺という寺は存在しなく、曾良のメモが誤字または意図的な当て字だったのではないかとされ、正しいのは建聖寺ではないかと言われている。また、曾良は体調が思わしくないようで、随所に体調や薬のことが書かれている。

一行は山中温泉経由で那谷寺(なたでら)へ出向いたあと、大聖寺に行き、全昌寺を訪れた。

しかし、ここで曾良が体調不良ゆえに「おくのほそ道」の旅から離脱することになり、一足先に山中温泉から伊勢の長嶋を目指して単独行することになった。高岡から金沢までは「あいの風とやま鉄道」、乗り換えた鉄道は「IRいしかわ鉄道」、相変わらず意味の解らない鉄道路線名が続いていやになる。まずは大聖寺まで行ってみる。所要時間は1時間半から2時間というところか。駅から近いので芭蕉のルートに従って全昌寺を覗いて見るのもよい。

全昌寺を出た芭蕉は大聖寺川河口付近にある吉崎へ出て、船を出して汐越の松を尋ねた。川を渡れば越前国(現在の福井県)になる。

吉崎は浄土真宗中興の祖である蓮如上人誕生の地である。川の南側には、加越台地の浸食による谷に水がたまってできたと言われている北潟湖がある。

そのあと、丸岡の天龍寺などを経て福井の永平寺に向かった。

大聖寺から、「ハピラインふくい」というこれまた恥ずかしくなるような名の鉄道に乗って福井へ30分。福井駅から「えちぜん鉄道」で永平寺口まで30分。福井駅での乗換えの待ち合わせ時間を30分ほど見ておかないといけないので、計1.5時間ぐらいの行程になるだろう。

永平寺を見て、福井で一泊することにする。<福井に一泊>

●越前から近江・美濃へ

山中温泉で芭蕉と別行動をすることになった曾良は、各地に滞在することなく最短時間で伊勢の長嶋を目指した。当然のことながら、ルートがいくつも存在するわけではないので、結果的には同じルートを何日か先行しているという感じになった。

芭蕉は永平寺を見たあと、福井に出て俳諧仲間の等裁を尋ね、そこに何日か滞在して敦賀に向かった。「おくのほそ道」に記されている地名を拾っていくと、福井から武生・南今庄を経て敦賀の港に入ったことがわかる。日本海側へ出るのに越えた峠は山中峠か、木の芽峠だと考えられる。

そして敦賀の港から船を出して、敦賀半島の色ヶ浜まで出向いたようである。現在の地図で確認すると、色ヶ浜は敦賀半島の東側の海岸で、半島の先端にある敦賀原発のやや南にある。

一方曾良は、北国街道を歩いて栃ノ木峠を越えて余呉・木之本・長浜と進んだようである。

鉄道の旅は、福井から再び「ハピラインふくい」に乗って一時間弱で敦賀に着く。途中で潜り抜ける北陸トンネルも楽しみのひとつになる。

芭蕉が赴いた色ヶ浜へ行くのには、コミュニティバス常宮(じょうぐう)線で30分ほどだが、一日三往

復しか走っていないので帰れなくなる可能性もある。12時35分発のバスに乗って終点の半島の先端にある立石まで行き、一旦下車して12分後に出る戻りのバスで帰って来るのも面白いのではないか。気比の松原・色ヶ浜などの景勝地や原発を車窓から眺めて楽しむのも悪くない。14時過ぎには敦賀駅に戻って来られる。

「おくのほそ道」の記述は、色ヶ浜を楽しんだあとは、「駒に助けられ大垣の庄に入る」となっており、途中の様子は書かれていない。

また、曾良の記録を見ると、長浜から船に乗って彦根に入っている。彦根城を通り過ぎて平田経由で多賀に入った。多賀大社に立ち寄るのが目的だったようだが、記述はない。そして鳥居本を通過して摺針を越えて関ヶ原に入ったと書いてある。

摺針峠は鳥居本駅の北東にある海拔154mの峠で、琵琶湖を見下ろす絶景の地。峠を北東に谷沿いに下って行くと天野川の本流に出て、米原からの道と合する。天野川の広い谷を遡って醒ヶ井から支流の梓川に入って、複雑に入り組む尾根をいくつも越えて行くと不破関を経て関ヶ原に達する。

ここまで来ると行く手に美濃の平野が見えてくる。

鉄道の旅は、敦賀を出ると衣掛山のループトンネル(鳩原ループ)を抜けて五位川の谷間の景観を楽しみ、深坂トンネルを抜けて滋賀県(近江)に入る。余呉駅を過ぎると曾良が歩いたルートに合流する。しかし、北陸本線は近江塩津から湖西線経由で大阪へ行く本数が増えて、由緒ある北陸本線で米原・京都経由のダイヤはかなり不便になってしまった。しかもいずれの路線も行先が山陽本線の兵庫県方面になっているので間違わないようにしなければならない。時刻表をよく見て注意深く行動する必要がある。米原には夕方までには着くことができるだろう。

芭蕉は大垣で曾良との再会を果たし、仲間が寄り集まり愉快的ひとときを過ごしたようなので、こちらでも米原で東海道線に乗り換えて、関ヶ原を車窓から眺めながら大垣まで30分の旅。<大垣に一泊>

●おまけの旅として

旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮おがまん、又舟に乗りて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

「おくのほそ道」は、これで終わっている。芭蕉は、伊勢神宮の式年遷宮を参拝したあと故郷の伊賀に帰った。と言っても、伊賀上野を拠点として京都・大阪へ何度か旅を繰り返したあとで深川に帰った。

大垣で一泊した翌日、すんなり東京へ戻るのでは面白味がない。

大垣から東海道線で名古屋へ出て、関西本線に乗り換えて、伊賀上野まで二時間ほど。

伊賀上野で伊賀鉄道に乗り換えて7分ほどで上野市駅に着く。ここが松尾芭蕉誕生の地。伊賀の里で一泊か、名古屋に出て一泊か、旅の最後の晩を楽しもう。<伊賀上野または名古屋に一泊>

●旅のしめくり

我が身を運んで旅をした松尾芭蕉に敬意を表して、こちらの旅は名古屋から各駅停車を乗り継いで帰ることにしよう。

名古屋9時04分発豊橋行に乗る。豊橋着で11時07分発の浜松行に乗り換え浜松には11時42分。少し早いけど外に出て昼食と休憩。

浜松12時51分発の静岡行、静岡14時13分発熱海行、熱海15時33分発高崎行と乗り継いで東京着は17時36分。

こんな旅があっても悪くない。深川の清澄白河駅を出発して二週間ほどの旅になる。

一気に二週間をかけて旅をすることが無理ならば、自分の都合や体力や興味に合わせていくつかに分割して、細切れの旅を何回か繰り返す「分割お遍路の旅」のような方法でも良いのではないか。

以上